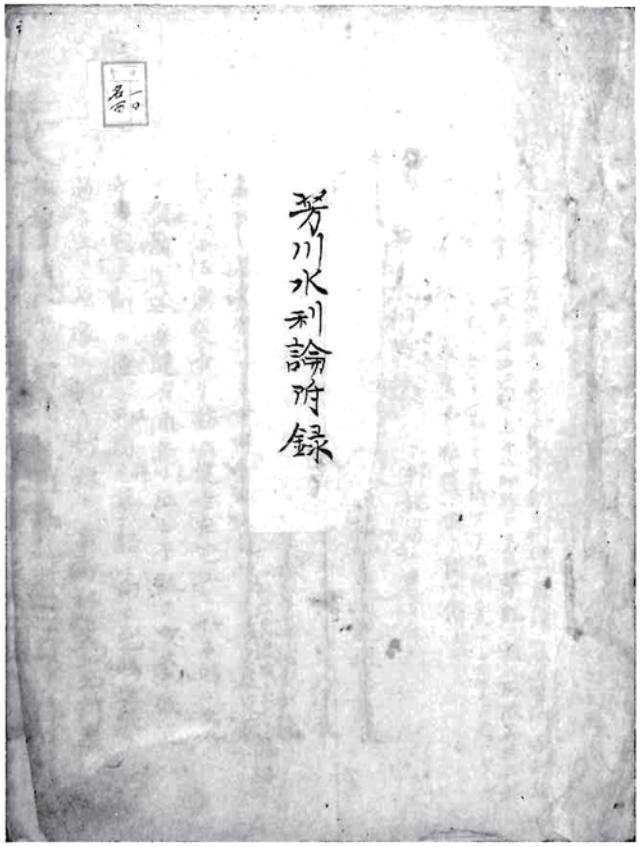
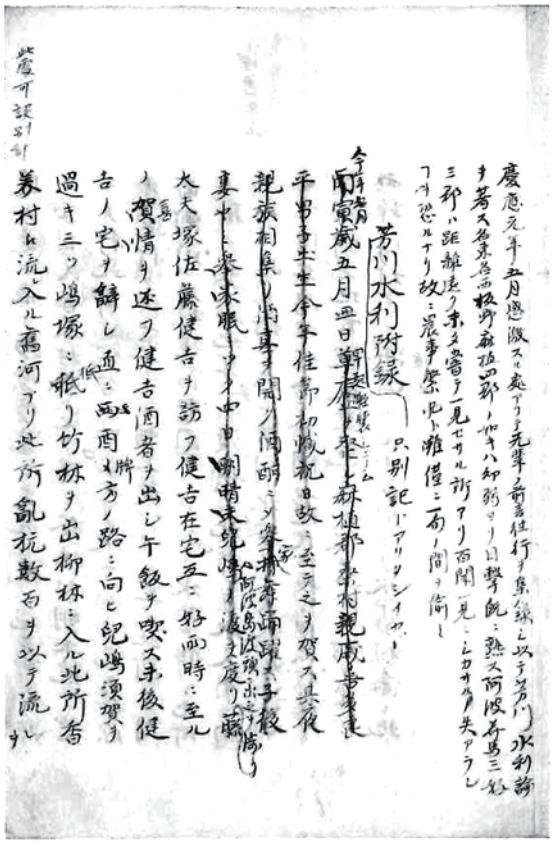
芳川水利論附録

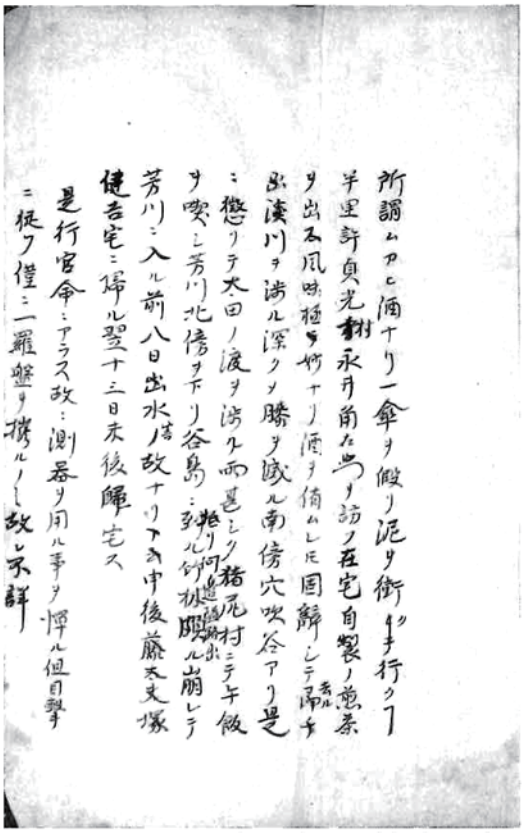


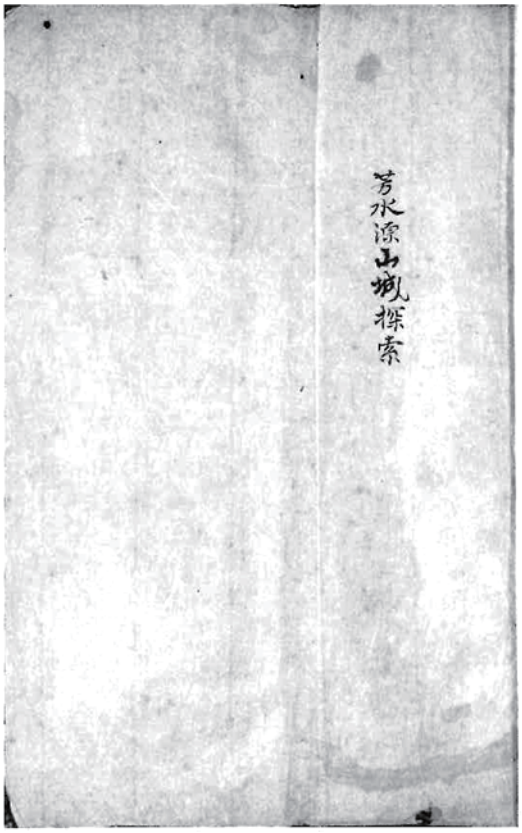
芳川水利論附録

表紙



冒頭





芳水源山城探索

末尾

慶応元年五月、感激する処あり。先輩の前言往行を集録し、以て芳川水利論を著す。名東・名西・板野・麻植四郡の如きは、幼弱より目撃既に熟す。阿波・美馬・三好三郡は、距離遠く未た嘗て一見せさる所あり。百聞一見にしかさるの失あらん事を恐るなり。故に農事繁忙と雖、僅に一旬の間を愉み今年五月四日、早起軽装して〔此の間三行消す〕阿波島渡頭に出、之を渉り藤太夫塚佐藤健吉を訪ふ。健吉在宅互に好雨時に至るの喜情を述ふ。健吉酒肴を出し午飯を喫す。未後、健吉の宅を辞し、直に西酉の方の路に向ひ、児島須賀を過き、三つ島塚に抵り、竹林を出柳林に入る。此所香美村え流れ入る旧河あり。此所杭数百を以て流れを遮る。是に依て砂礫壅塞して流れ既に絶し、柳営処點々存在す。香美村南辺を過り、谷島村明王院を望んて行。此間日開谷の吐出口あり。水一滴を見す。砂原広遠、行こと五六丁にて明王院の下に至る。此所芳川南側川田村堤防堅固なるにより、

慶應元年五月に感ずるところあり、先輩たちの発言・記録を収録して芳水水利論を著した。名東・名西・板野・麻植四郡は、幼年時代より十分に見てきた。阿波・美馬・三好三郡は、距離が遠く未だ一見もしていない所もあった。「百聞は一見に如かず」の諺にあるような失敗を恐れる。そこで農事繁忙の時ではあるが、僅かに十日間の暇を作って、今年五月四日に早朝より起き軽装して（以下三行消す）

阿波島の渡場に出て、ここを渡り藤太夫塚の佐藤健吉を訪ねる。健吉は在宅しており、互いに雨のために逢えたことを喜ぶ。健吉が出してくれた酒肴で昼食をとる。午後二時に健吉宅を辞し、真直ぐに西の方向に向かう。児島須賀を過ぎて、三つ島塚に至り、竹林を出て柳林に入る。ここには香美村へ流れる旧河道がある。ここに杭数百本を打ち込み、流れを遮っている。これによって砂礫で閉塞してしまい水流はすでに絶えている。柳の茂みが所どころにある。

香美村の南辺を通り谷島村明王院を目指してゆく。この間に日開谷の吐出し口がある。水は一滴も見えず、砂原は広く遠い。行くこと五ー六丁で明王院の下に着いた。吉野川南岸の川田村堤防が堅固であるので、水流がここを斜めに突き当

水勢斜に此所を衝く。故に土地年々潰損す。此処より水又南に向ひ三つ島を衝く。是れ芳川の水道に大害をなす大屈曲の起頭始なり。谷島村七八丁の間、土地大に損し、伊沢村堤あり。河側の地膏腴民豊饒にして水災なし。村の東に西野川村より吐出（噴出）する小谷川あり、水なし。村の西に北奥山より出る谷川あり。此亦水なし。東林村南に張出、土地広し。西林村、今昔水害多く、旧地大に損したり。如今川水直流して新地開け、土地肥えたり。平砂広遠なり。此所麁朶羽口を施してよし。既にして熟観終りて、厳津の渡頭に抵る。南は種保の神陵北に向ひ盤延す。水際の厳石甚た風趣あり。北岸も亦同く厳石にて、両岸の間百二三十歩、厳津の郷社、壇にあり。商賣軒を比へ風景極てよし。然も井泉一もなし。頑厳纔に土を載するを以てなり。此所阿波郡・美馬郡の界なり。行く事に歩にて棚田村の西拝原に出つ。水なし。其の広きこと二百歩余。此辺北辺より南に向ひ延亙したる丘陵あり猪尻邑は北陵に沿ひ、道路高く其左に当り稲田家の采邑あり。其下近年新地を開墾す。最も肥饒なり。申後、脇町紙屋喜兵衛宅に投宿す。

たる。そのため土地は、年々削り取られる。ここより水は南方に向かい三つ島に突き当たる。ここは、吉野川が災害をもたらす大屈曲の起点である。谷島村では、七－八丁の間に土地は大きく削られている。伊沢村には堤防がある。河岸の土地は、肥沃で、豊饒で水害はない。村の東に、西野川村から吐き出す小谷がある。ここにもまた水はない。村の西に、北の奥山から流れ出る谷がある。ここもまた水がない。東林村は南に張り出し、土地は広い。西林村は昔から水害が多く、土地は大いに被害を受けた。今は、川が直流して新地が開け、土地は肥えて広大である。ここには麁朶（そだ）・羽口を施して効果を上げた。十分に観察して、岩津の渡し場に至る。

〔岩津は〕南には種保の神社が北に向かって張り出している。水際の岩石ははなはだ風情がある。北岸もまた同じく岩石で、両岸の間は百二－三十歩である。岩津の郷社は高台にある。店が軒を並べ風景はすこぶるよい。しかし井戸は一つもない。頑丈な岩石の上に僅かに土を載せているからである。ここは阿波郡と美馬郡の郡境である。歩いてゆくと棚田村の西、拝原に出る。ここも水はない。その広さ二百歩あまり。ここは北より南に向かって広がった丘陵地である。猪尻村は、北の山稜に沿い道路が高くなっていて、その左側に稲田家の支配地がある。その下を最近開墾した。非常に肥沃な土地である。午後四時に、脇町・紙屋喜兵衛宅に投宿する。

五日朝晴、西風寒く、辰後発す。此所巨商多く、百貨あらさることなし。讃州・予州に売販す。故に頗る繁華、只徳府に譲るのみ。其余郷市、此に及ふ者なし。其西南、新地を墾闢し、最も肥土なり。川滸柳竹を植て頗る心を用ひたり。

是より吉川北傍、岩倉・野村・小長江・郡里・重清・西村・清水・加茂野宮・勢力・芝生・十一ケ村、平地南傍より広く、荒地・牧場を見る。川岸の防理甚た疎なり。

午後、芝生に至り茶店に小憩し、午飯を喫す。酒肴、鮎魚のみ。芝生・西立野山より流れ出る谷あり。水なし。其西に丘陵あり。太刀野村平地広し。其西に丘陵あり。此所辻より水勢斜に北に向ひて衝突す。然といえども河岸堅固なる故に、土地損壊せす。丘陵を西に向て下れは、河水北山に逼る。山脚狭窄なり。先年此所より堰圧して太刀野に漑く測量せし由、土人の説あり。然とも水程能く趣かさるよしにて止むと云ふ。

夫れより、足代・昼間を過る。足代土地広し。昼間に至り、箸蔵山東谷より水流る。是に至て始て北傍の山水の流を見

〔五月〕五日、朝晴れ。西風寒く、午前八時に出発。ここ（脇町）は、巨商が多く、物資で無いものはない。讃岐や伊予にまで取り引きがある。そのため大変な繁盛でただ徳島には及ばないだけである。その他の郷町はここに及ぶものはない。その西南を開墾し、非常に肥えた土地である。川岸に柳や竹を植え、大変に配慮している。

ここから吉野川の北側の岩倉・野村・小長江・郡里・重清・西村・清水・加茂野宮・勢力・芝生の十一村は、平地が南側より広大だが荒れ地や牧草地である。川岸の水防はきわめて疎かである。

十二時に、芝生に至り茶店で休み昼食をとる。酒肴は鮎だけである。芝生・西立野山から流れ出る谷があるが、水は無い。その西に丘陵あり、太刀野村の平地は広い。その西にも丘陵があり、ここに、辻よりの水流が斜めに北に向かって衝突している。しかしながら河岸が堅固であるため、土地は損耗していない。丘陵を西に向かって下ると、川の流れが北山にせまり、山すそは狭隘である。先年、ここを堰止めて太刀野に潅漑をしようと測量したという事を土地の人から聞いた。しかし水が調子よく流れなかったために中止になったという。

そこから足代・昼間（村）を過ぎる。足代は土地が広い。昼間に着くと、箸蔵山の東谷から水が流れている。ここで初

る。一時麦秋を過き、往々点々早苗を投するを見る。夫より路を池田の渡頭に出つ。底平の船にて渡る。

池田邑、土地高く市街繁盛貨物陳列せり。今日佳節ゆへ、桜上絲竹を弄し宴席を開くを見る。御陣屋、宏潔厳重なり。其西十丁許の間、稲田沃饒なり。大ひなる池塘あり、方百歩、余多く蓴荇を生す。小艇を浮へ之を採るを見る。少しく山坡を登り峠に仏庵あり。其下に茶店あり。小憩して残餉を喫す。未後、山坡を下る。路傍に樗類よく繁茂す。

申後、板野より白地に渡り、三木氏を訪ふ。主人不在、須叟にして帰舘す。十年の間一信なかりしに因り、与に情欵を吐き鬱陶を一掃し楽み言ふはかりなし。然に今日端午の佳節、近隣え賀宴に招ねかる。己むを得す行く。老母酒肴を出し、独飲酔を尽し、亥後、寝に就く。

六日晴、二十一人と閑話の次て、予か著す所の芳川防水策を出し議論を請ふ。主人即ち決起門を出て、未後、佐野峠より流れ出る所の溪澗を見る。此節多く田疇に漑くを以て、水常

めて〔吉野川〕北岸の山から流れを見た。時期は陰暦四月を過ぎ、しばしば点々と早苗を田に植えているのを見た。ここから道を池田の渡し場に向かって進み、底平の船で渡る。

池田の村は、土地が高く、市街は繁盛して商品が陳列されている。今日は紋日（端午の節句）のために、桜のほとりで三味線を弾いて宴会をしているのを見る。御陣屋は、立派厳重である。その西十丁ばかりの間は、稲田がよく育っている。大きな池があり、四方百歩余り、多くの菱荇（ひしとじゅんさい）が生じており、小舟を浮かべてこれを取るのを見た。少し山坂を登ると峠に仏庵があり、その下に茶店がある。少し休憩して弁当の残りを食べる。午後二時に山坂を下る。道端にオウチ（せんだんの古称）類が繁茂している。

午後四時に、板野から白地に渡り三木氏を訪ねる。主人は不在であったが、間もなく帰宅した。十年間、書簡さえ途絶えていたので、お互いに旧情を述べ気がかりを晴らして再会を喜びあった。しかし今日は端午の節句で、〔三木氏は〕近隣へ祝賀の宴会に招かれ、やむを得ずそちらに行く。〔三木氏の〕老婆は酒肴を出してくれ、独飲して酔い午後十時に就寝する。

〔五月〕六日、晴れ。二十一人との談話について、私の著述した「芳川水利論」を出して、議論を乞うた。主人は席をたって外出した。午後二時、佐野峠より流れ出る渓谷を見る。この節、多くの水田に潅漑しているので水は常より少ないという事だった。そこを見終り、水歌仙笑楼に行き宴会を開く。

より少しき由なり。見終り水歌仙笑楼に登り宴を開く。酒既に醇美なる上に、新獲の香魚を、幽鼓をねさしならむ、以て羹となし出す。味絶妙、飲啖両つなから尽くし、黄昏共に帰る。夜に入りて又灯下に談す。家人皆睡る。主人奴を呼ひ、臥具を取て寝ぬ。

七日雨、節梅天に入、雨絲々とて声なし。午後一傘を借り、雨冒し山城谷に向ふ。此処白地より水流屈曲す。午牌に至り、山路狭隘なり。湿甚しく、高低上下咫尺を辨ぜす。独山脚の一路を行。路傍茅草乱れ生し、之に触て衣袴頗る湿ふ。下川村に至り、酒肆にて一杯を傾け、草鞋を購ふ。是村中、水難にあり。水声列しく、棉花を流すか如し。其余水流甚く緩く、櫓を以て遡る。川口村に至れは、伊予川・土佐川落集の所なり。伊予川の水兼て思ひしより多く且つ深し。艇を以て渉る。棕櫚の綱を上下に引き、其綱に藤環を着け、環に草索を結ふ。索を攀て引は船自ら岸に至る。此所に灘あり。前下川の灘に比せは頗る険なり。此より船登ることあたはす。川口村茶店に小憩し、酒を傾、青魚の乾せる者を取て下物とす。苦渋口を刺す。

酒は非常においしい上に、捕れたての鮎を（不明）羹（あつもの）（吸い物）にして出す。味は絶妙であった。飲み食い十分に尽くして、たそがれに帰る。夜になって灯火のもとで、また談ず。家人はみな寝る。主人は下男を呼び、〔わたしの〕布団を敷かせて寝た。

〔五月〕七日、雨。梅雨の時期になり、雨はしとしとと降る。十二時ごろ傘を借り、雨を冒して山城谷に向かう。ここは白地より水流が屈折している。午牌（ママ）に至り、山道は急に狭隘になる。湿気が甚だしく、高低上下、一寸先も分からない。一人で山側の一路をたどり行く。路傍に雑草が茂り、これに触れて衣服は大変にべとべとになる。

下川村に至り、酒屋で一杯を傾けて草履を買う。この村は、村中に水難の経験があった。今も水音が激しく、綿花を流したように白濁している。その他の所では、水流は甚だしく緩やかで、櫓を漕いで川をさかのぼる。川口村に至れば、伊予川と土佐川の合流する所である。伊予川の水は以前の思っておったより多くまた深い。船で渡る。棕櫚（しゅろ）の縄を両岸に上下に引き、それに藤かずらの輪を付け、輪に草縄を付けておく。草縄を上げて引けば、船は自然に岸に着く。ここには灘があり、前の下川の灘に比べれば、いたって危険である。これより上流は船が登ることができない。川口村の茶店で少し休憩をし、酒杯を傾ける。にしんの干物を酒の肴とする。苦みや渋みが舌を刺す。

申後、国政村大久保勝助の宅に至り、三木氏の伝書を出し、僕奴を借り郷導とし阿戸の奇景を探る。山路を下ること百二三十歩、甚た阻なり。漸く水際の厳上に至り之を視るに、初二日大に雨ふり、今亦雨なる故に、水常尺より高く、天地地造の観を尽すこと能はす。実に遺憾なり。西岸より東の岸の間十間に過す。実に聞しに違はす。芳川五十里の長流に於て、此所最も咽喉の所なり。

其上流六十歩許にて石瀬あり。愚以為く此西岸に経八尺許の円穴を鑿ち、阿戸の下に達し伏流せしめ、此所に仮りに柴薪を以て流れを塞き、水を穴より通せしめ、阿戸は平地の如くならしめ、上下河側の石を取り、尤も堅牢に築き立、其高さ十二間許、基礎五十間許、其頂き広さ二十間許、上流水衝に当る方、城塞の如く随分けわしく積むへし。後の方は自然斜に積むへし。水八間の高きに登れは、二間許の水門を開き置、水を洩し流すへし。是前書に所謂注子の口より計り出すか如し。水一時に怒漲することを得さらしむの術なり。又簡易の一術あり。白地渡頭より御境目まて行程七里許、其間河上竹

午後四時に、国政村の大久保勝助宅に至り、三木氏の伝書を出し、使用人を付けてもらって阿戸の景観を探った。山を下ること百二－三十歩、甚だ危険な道である。やっと水辺の岩上に立って川を見るに、初めの二日、大いに雨が降り、今また雨のため、水は常より一尺ほど高く、天地創造の絶景を見尽くすことが出来ず、実に残念であった。西岸より東の岸まで、十間に過ぎない。誠に伝聞に違わず素晴らしい。吉野川五十里の長流において、ここは喉もとに当たる場所である。

この上流六十歩ばかりの所に、石ばかりの瀬がある。私が思うに、この西岸に直径八尺ほどの円い穴を穿ち、阿戸の下流に伏流させる。そしてこの場所に柴薪などで流れを塞ぎ、水穴より通じさせて、阿戸を平地のようにし、上下の川側の石を集め、非常に堅牢に築き上げ、高さ約十二間、土台約五十間、その頂きの広さ約二十間、上流の水の衝撃を受ける所は城砦のように厳しく積むべきである。下流側は自然な斜面に積めばよい。水が八間の高さになれば、二間ほどの水門を開いて水を漏らす。これは前書にいわゆる「水差し（注子）の口より測り出すごとし」と言ったもの。水を一時に溢れさせぬ方法である。また簡単な一法がある。白地の渡場から境

木の類ある事稀なり。両辺七里の間、地勢に随ひ柳竹樗榛の類を植へ、永年截伐を厳禁すれは、三年にて見はし、十年の後小切を察し、三十年にて大功を得へし。是れ自然復古の防水術なり。然も樹木蕃茂するに随ひ、枝条自然に水上に傾き、最も狭溢の所に至ては両岸の樹木枝条を交ゆるに至り、又藤蔓・蘿葛交絡せは船筏浮材の便を失ふへきなれとも、一洪水の損費幾巨万なる水害の大なる者に較ふれは、其得失果て如何そや。

其夜国政茶店に宿す。雨休す。水声轟々、蚊あり蚊帳無く終夜眠ることを得す。暁に至り一睡す。

八日朝、雨休み曇て晴す。雲霧壑を覆ひ、或はとひ或は凝り、千姿万像頗る奇観なり。

辰後、大久保氏より伝書を贈り来る。夫より国政を発し、光金の山脚を歩す。此所より川流辰巳の間に転曲す。午前天将に晴とす。暑気甚しく、汗出衣襦皆湿ひ、顔額拭に間なく、行路狭く石磴崎嶇、脚難攀此間一里許、或は百歩、或は百五十歩許りにて石瀬あり。其中三四ヶ所夏秋の間、海底の鳴る

目までの七里程、その間に竹木の類あること稀である。七里の間、両側に地勢にあった柳竹樗榛（はんの木）を植える。そして長年伐採を禁止すれば、三年で階段口、十年の後には大体が察しられ、三十年後に成果が現れる。これ自然復古の防水術である。しかも樹木が繁茂するに従い、枝が自然に水上にかぶさり、もっとも川幅が狭い所では両岸の樹木の枝が交差するに至り、またかずら類が交差すれば船筏の通行の便を損なうようになるが、一洪水の損害巨万という水害の被害に比べれば、その得失はどうであろうか。

その夜は国政の茶店に宿る。雨やみ、水流の音ごうごうたり。蚊がいるのに蚊帳がなくて終夜眠られず。明け方に一睡する。

〔五月〕八日朝、雨やむ。曇って晴れず。雲霧が立ち込めており、あるいは飛び、あるいは凝固し、千姿万像みごとな奇観を見せてくれる。

八時、大久保氏より伝書を送ってくる。それから国政を出発し、光金のふもとを進む。ここから川は、南東の方向に曲がって流れる。午前十一時、空はまさに晴れんとする。暑さ甚だしく、汗が吹き出し衣服ことごとく濡れ、顔の汗を拭き続ける。行路が狭くなり、岩石の坂道は登攀（とうはん）がきわめて困難である。この間、約一里ばかり。百歩か、百五十歩ごとに岩石の瀬に出会う。その中に三―四か所、夏秋だけ海底の鳴る

如き所あり。郷導なく路見へす、之を探ること能はす。其音とんとん、堂々、川底空穴あつて、水其中に入るかとをもへり。

漸く小歩蹇を過て、路傍土人の家に寄り、茶を乞ひ喫す。少く心気元に復す。此を発し、西宇氏の邸を行々見望して、山坡を下る。西宇氏亭あり、灰瓦を以て葺く。二階作り欄檻を施し、雅潔なり。其余大楼門廨皆茅を以葺く。門前良田壱町余あり。早苗既に植へたり。隣、臣家の家と見え粉壁目に粲たり。夫れより深林中一路を探り、行くこと十丁許にて大歩蹇にかかる。両岸の山、漸次に峻絶、雲霧嶺を呑、適霧晴雲散と雖も、仰て巓を見ること能はす。又何れの所に路あるを見す。始めは百尺弐百尺断岸千尺、最も高き所に至ては千尋とも揣り難し。九折羊腸を経て、厳稜二三を回超すれは、気息喘えき喉間声を成す。

枯渇少く平所を得て、団飯一つを喫し、少く気力を養ふ。勇奮又登る。目は落んことを懼れ、耳は水声に攪せられ、鼻は幸ひ香気を聞かす。因てまむしの怖れなし。然とも一歩過れ

ようなが音がする。道案内がおらず、道が分からないので、この真相を探ることはできない。その音は、トントンであったり、ゴウゴウであったりで、川の中に空洞があり、その中に水が落ちる音か、とも考えられる。

やっとのことで小歩危を過ぎて、道端の地元民家に入り茶を所望する。少しは元気になった。ここを出発して、西宇氏の屋敷を望みながら山坂を下る。西宇氏の東屋は二階建の瓦葺きで欄干を作り趣がある。その他の母屋、門、仕事場などは茅葺きである。門前には良田が一町ばかりあり、すでに早苗が植えられている。隣には、使用人の家と見える白壁が目にまぶしい。それより林の中の一本道をたどり、行くこと十丁ばかりで大歩危にさしかかる。両岸の山は次第に峻厳となり、雲霧が山の頂きを覆っている。時には霧が晴れ雲が切れ、頭上を仰いでも〔谷が深すぎて〕山頂を見ることはできない。またどこに〔山頂への〕道があるか分からない。最初は、百尺二百尺の断崖が、千尺になり、もっとも高い所になると千尋（一尋は六尺）とも測りがたい。曲がりくねった道を経て、岩稜（岩石の露出した尾根）を二―三か所のり越えると、息は切れて喉の間からの喘ぎ声だけである。

腹も空いたので、ちょっとした平地を見つけ、握り飯一個を食べ、少し元気になり、元気を出してまた登る。目は落ちることを恐れて用心し、耳は水音に乱されて聞こえず、鼻は幸いなことに香気をかぎつけない。だからマムシの心配はな

は千尋の高より深淵に陥らん。惟々路を見て行くのみ。実に致一無適敬の実致此に在を得、且如臨深淵の意味爰にて始て得たり。益々高きに度れは、水声聴へす、因て其高きを知る。其辛苦云へからす。幸ひ夏時、木葉稠密風なく残鶯と蜀魂と所としてあらさるなし。聊か余労苦を慰するに似たり。此間半里許、三里許と思へり。僅に正路を得て上名に抵り、茶店に小憩す。頗る大ひなる酒桶あれども払底して一滴もなし。呆然失望す。干魚にて残餉を喫す。

此所藤川氏邸宅路迂なる故に見す。夫より藤川に至る。架するに板橋を以てし猶欄檻を施す。水勢強張、上名・下名の間三十丁許、下名に至る。此雨灑く大黒氏邸宅を見るに、山にそひ石を畳む事一丈四五尺、門正北に向ひ、大楼正東に向ふ。粉壁茅葺なり。

是より路を東南に取り、荒川越後の宅に到着し、大久保氏の伝書を出す。雨甚し。因て草鞋を脱し一宿を占め、前境度険の疲労を休す。越後父齢既に七十余、身体健にて農事を務む。家族温和、三夫婦あり。父老日、去る文化元甲子洪水予か庭

い。しかしながら一歩過れば千尋の高所より深淵に落ちこむだろう。ただただ道を見て歩くばかりである。実に「一事に関わって敬に適わずの実」とはこの事と実感した。かつまた「深淵に臨む」もここで実感した。ますます高みに至れば、水音は聞こえなくなり、またそのために高所であることを知る。この辛苦は表現できない。幸い夏で、木の葉が繁茂し風もなく、老鶯とほととぎすが鳴いていない所がない。わずかばかり私の労苦を慰めてくれるようだ。この間は、半里ほどだが三里くらいに思えた。やっとまともな道に出て上名に至り、茶店で休んだ。大変に大きな酒桶があるが、払拭して一滴もないのにはがっかりした。干し魚で残りの弁当を食べる。

ここは、藤川氏の屋敷は路が曲っているため見ることが出来ない。それより藤川にいたる。板橋を架け、さらに手すりを付けている。水勢は激しく、上名と下名の間は、三十丁ばかりで、下名村に到着する。雨の降り注ぐ大黒氏の屋敷を見ると、山に添って石を積むこと一丈四－五尺で、正門は真北に向い、母屋は真東に向かっている。白壁の茅葺きである。

ここから道を東南に取って荒川越後の宅に到着し、大久保氏の伝書を出す。雨激し。そのために草履を脱いで一宿をゆだね、これまでの疲労を休息す。越後の父親は、すでに七十才あまり、身体健やかで農事に勤しむ。家族温和、三代の夫婦がいる。父親は言った。文化元年甲子の洪水はわが庭まで

に至る。常より高きこと四丈なり。其後嘉永酉年猶髣髴たりと云。小生実父に聞所に同じ。洪水も極ありと云へり。越後の宅、寅卯の間に向ふ。川流は巽より乾に流る。此所祖谷え渡る船、越後の宅向河岸に鉾大明神の旧社あり。

樹木蓁々、樹幹枝条、皆川上に傾き生す。大水の時水漲を遮るへし。其余は川傍地を掃て樹林無し。

越後云、此際二里許五灘あり。一は阿戸、二は井戸、三は下戸、四は轡、五はもち場、皆船筏を通せす。土州三灘あり、此八灘に閘を築き蓄洩すれは、四十里の間漕河と成るへしと云。

其夜筆菽煎て酒を呑む。挙家炉辺に団話す。蚊無し。東南より風吹、雨頻りなり。二更の頃寝す。

九日朝、雨やみ、塗浪漲り水より高きこと一丈五尺許、故に渡船阻む。辰後、快晴、軽装して下名山陵に随ひ行、路稍狭く人家近き故に、蒸薪の為山木を伐り田畑を闢く。両山に逼り川体狭く鶏足山の下に至り弥々溢なり。誠に三峡の地かくあらんと想像す。

来て、そのときは平常の水嵩より四丈高かった、と。またその後、嘉永二年酉年のときの事は、なお彷彿と思い出すと言った。わたしが父親に聞いたのと同じである。洪水にも上には上があるものだと言った。越後の家は、北北東と真東の中間に向いている。川の流れは、南東から北西に流れている。ここは祖谷へ渡る船の乗り場、越後の家の向岸には鉾大明神の旧社がある。

樹木繁殖し、樹幹枝葉はすべて川上に向いて傾いている。大水のときは水勢を遮ることが出来る。その他、川辺の地に樹木はまったくない。

越後が言う。この辺り二里ばかりに五つの灘がある。一は阿戸、二は井戸、三は下戸、四は轡、五はもち場で、すべて船筏が通れない。土佐には三灘ある。この八灘に閘門を築いて、川水を蓄えたり放水したりすれば、四十里の間は通行可能の川となるだろう、と。

その夜、枝豆を煮て酒を飲む。家族中が炉端に集まり談話する。蚊はいなかった。東南より風が吹き、雨はしきりに降る。午後十時に寝る。

〔五月〕九日、朝、雨やむ。道に波が漲り、水面より高きこと一丈五尺ほど、このため渡し舟の運行を阻む。八時快晴。軽装にて下名の山稜伝いに行く、道はやや狭い。この辺りは、人家が近くて、薪用に樹木を伐り田畑を開いている。両側の山が迫り、川幅は狭い。鶏足山の下に至ると、いよいよ水は溢れる。誠に〔中国の〕三峡の地はこんなものだろうかと想像する。

此境一望樹無く行々川流を眺望して心気疲れ目眩するに至る。山陵を回り弥間吾の宅に到り小憩、茶を喫す。其時乞食親子四人、土州の方より来る。此者当国那賀郡立江村の産、昨十一月より土州に入、普く国中を徘徊せしよしなる故に、土州当時の形勢を問へは、此者奸黠能辯即ち答云、当節土州城下の東南に当り、交易舘六宇を建つ。最も宏潔なる由し。御隠居新邸成就す。海岸大炮数十門、最も大ひなる玉百八十貫を放すと云。万治郎昨十一月帰国、当正月十八日産所中浜に帰り、父母を省す。今猶在と云。挙国の民上を怨む心あり。近年米価他国に同く高価なる由なり。予国札一葉を与ふ。乃ち喜ひ去る。弥間吾宅、南に向ひ庭中通路なり。山腹狭路を下る斜に十町余、御境目に至る。渓澗水多く水源壱里半、土州雑木能く茂り松杉桧類満眸不見。然とも番所関門の傍、栂林杉木稠く植て、横に竹木を結堅め厳重の由なり。国禁なれば土州地一歩を踏ます。渓澗拳の大さなる蟹を見て反る。南浦嘉治郎の宅に入、午飯を喫す。雨余炎熱甚し、汗脊面に

この辺りは、一望して樹木がないので、行く途中、川の流れを眺望しても身気が疲れ、目が眩む思いがする。山稜を廻って弥間吾の家に至り休憩して茶を飲む。このとき放浪者の親子四人が土佐の方からやって来る。この者は阿波国那賀郡立江村の生まれで、昨年十一月より土佐に入り、あまねく国中を徘徊したという事なので、土佐の形勢を問う。このもの小賢しく能弁である。そこで次のように答えた。最近、土佐城下の東南に、交易館が六軒たった。大変広くきれいである。旧藩主の新居が完成し、海岸に大砲が数十門据えられた、最大のものは一八〇貫の玉をはなつという。〔中浜〕万治郎が昨年十一月に帰国し、今年の正月十八日に生地の中浜に帰り、父母をかえりみた。いまなお故郷にいる。〔土佐は〕国を挙げて藩主を恨む心あり、近頃は米価が他国と同様に高価になったという。藩札（国札）一枚を与えた。喜んで行った。

弥間吾の屋敷は、南に向かっている。庭の中に通路がある。山腹の狭い道を斜めに下ること十町あまりで〔土佐との〕境目に至る。渓流の水は多く、水源は一里半さき。土佐の雑木はよく茂り、松・杉・桧の数、見渡す限りである。しかしながら番所の関門の横は、栂（つが）林、杉木を多く植え、それに竹や木を横に固く結びつけて厳重にしているようだ。国禁なので土佐の地には、一歩も入らなかった。渓谷に居る手のひらほどの蟹を見て帰る。

南浦嘉治郎の屋敷に入り、昼食を食べる。雨上がりの炎暑

浹り鼻尖に滴り誠に苦熱なり。彼の宅、巳の十五度に向ふ。川流も同く彼方より流る。土州の地に入れは、宛転未申の方に向ふよしなり。

下名山中、蓬多く生す。又茶園の間に梶を植たるを見る。嘉次郎宅、牝猫を畜ふ。毛色甚た奇、宛も鼠の如く、一つの虎毛の子を乳す。是故を問へは、虎毛の牡猫土州より来る、故に虎猫を産すと云。天涯比隣の如し。陰陽国界なし、一笑して去る。

帰路祖谷山を眺望するに、樫尾山熊谷より落る谷水を有瀬と云。土州の界なり。水瀑布の如く芳川に入る。鶏足山の東より谷水又芳川に入る。未後、雨ふり満身濡て越後の宅に帰る。渡頭水減すること壱丈弐尺許。然とも夕景未た通せす。故に又越後の宅に再宿す。其夜の茶話に、昔し何れの人なるを知らす、土州の山に入り木を伐り、大桴結構し其上に屋宇を営み、宛も平地に立るか如く美を尽し、三年天地の神に大水有んことを祷る。其年大水あり、大桴浮ひ流る。親族是に乗り音楽を奏し下名・上名に抵る。伊予川落合の所河口村にて礁は甚だしく、汗が背中にべったりで、鼻先に滴り、誠に暑苦しい。彼の家は、南南東の方向に十五度に向かう。川の流れも同じ方向より流れる。土佐の地に入れば、にわかに南西の方向に向かうということだ。

下名の山中には、蓬(よもぎ)が多く生えている。また茶畑の間に、梶の木を植えているのを見かける。嘉次（治）郎の家には牝猫が居る。毛色がはなはだ変わっていて、あたかも鼠のようである。一匹の虎猫に乳を飲ませている。この訳を問えば、虎毛の牡猫が土佐より来て、このため虎毛を産したという。「天下はすべて隣のごとし、雌雄に国境なし」一笑して出発した。

帰路、祖谷山を眺望すると、樫尾山の熊谷から谷水の落ちる所を有瀬という。土佐との境である。水が、滝のように吉野川に流れ込む。鶏足山の東よりの谷水がまた吉野川に流入する。二時に、雨が降り全身ずぶぬれになって越後の家に帰る。渡し場の水位の減少は、一丈二尺ばかり。しかし夕方まだ通ぜず。このため越後の家に再泊する。その夜の茶飲み話に、昔、どこの人か知らないが、土佐の山に入り、木を伐り大筏を組み、その上に小屋を造って、あたかも平地に居るかのように美しく作った。そして三年間、天地の神に洪水がおこるように祈った。その年に、大水が起こり大筏が浮かび流れた。親族がこれに乗り、音楽を奏しながら下名・上名に至っ

に触れ、大桴破砕し挙族沈没す、妄作と云へし。此れを与五郎水と云。二更寝に入。今宵酒を呑す眠る能はす。

此の越後なる者、此下名産神の神主なる由。大黒氏を始め元暦の昔京師より爰に来り、天下の乱を避け深山に安居す。予を以て之を見るに、今山城・三名の人、深山辟境と雖も容貌鄙俗を離れ言語婉曲古言伝り、誠に帝郷の風習残れり。君子居之何陋之有ん。

十日朝晴、衆巒皆顕る。辰後、越後の宅を辞し去り、即ち渡頭に出つ。水猶薄濁り略平常水に近し。

船を呼び乃ち船岸に至る。直に祖谷に渉る。其広きこと三十間許と云。是より山脚の路を探り、徳善寺を志し行く。路高低あり、斜に至る十丁許て、板橋欄あるを度る。山の半腹開墾し大麦多し。未た苅らす。徳善寺の名に至る仏閣あり、方二間許、茅を以て葺く。何の仏なるを知らす。又行くこと五六丁にて二屋あり。此より三里余り人家なし。立寄草鞋を購ひ、茶飯を喫す。茶銭を出せとも固辞て受けす。其風俗淳朴なり。是より山腹を登ること十五六丁にて、高陵に至れは大

た。伊予川との合流点（落合）の河口村で暗礁に触れて、大筏は破砕し、一族みんな川に沈んだ。妄作というべきであり、このときの大水を与五郎水といった。午後十時に床についた。今宵は酒を飲まず、眠れなかった。

この越後という者は、下名村の産土神社の神主ということ。大黒氏を初め、元暦の昔、京都よりこの地に来たり、天下の乱を避け深山に安住する。私がこれを観察しても、今の山城谷村、三名村（上名・下名・西宇）の人は、深山僻地に住んでいるが、容貌は田舎風でなく、言葉も婉曲で古語を伝え、誠に都の風習を残している。「君子居るや、何ぞいやしことあらん」。

〔五月〕十日、朝、晴れ。多くの山がすべて姿を現した。八時に越後の家を辞して渡し場に立つ。水なお薄濁り、やや平常の水位に近くなった。船を呼んで船岸に至る。直ちに祖谷に渡る。川幅の広きこと三十間ばかりと言う。これより山麓の道をたどって徳善寺を目指してゆく。道は登り下りして、斜めに十丁ほど行って板橋の欄干のある橋を渡る。山の中腹を開墾し大麦を多く植えている。まだ刈り入れはしていない。徳善寺の名の仏閣があり、二間四方、茅葺きである。何の仏さんか知らない。また行くこと五―六丁にして二軒屋がある。これから三里あまり人家はない。立ち寄って草履を買い、お茶漬け（茶飯）を食べる。茶銭を出しても固持して受け取らない。その風俗は純朴である。ここから山腹を登ること十五―六丁で、山稜に至ると大斜面の道になる。道の広さ一間あ

斜面の路なり。広きこと壱間余、行歩安く或は三丁五丁を下り、又登ること二三丁なり徳善寺後山より、酉牌に当り伊予石槌山を十里の外に見る。土州白髪山左に高く、黛色潤しく黒木蕃茂すと見へたり。此間三里余、讃州魚販二人に遇ふのみ。未後、美馬・三好郡の境に出。此所纔に石を畳み、塞門の状をなせる衡門朽て傾く。是より竜頭を下り、川崎村茶店に小憩し、下川を渡る。水甚た緩流、黄昏白地三木氏帰舘し、聞は主人今日午後乗船して徳府に下るよし。母公予か辛苦を憐み、家僕に命し新に湯をわかし浴せしむ。酒を出し夜飯を惠む。疲れて酒を呑む能はす。始終待遇甚た慇懃、僕奴の族亦鄭重、是以家道能く修まるを知る。

三木氏の関尹兼て八ヶ村の与頭なる故に、五十目筒三挺・十匁筒五挺・小銃十挺・弓五張・具足・鎗・長刀・械棍数十・武器略備・其余書籍文物奇品あり。誠に殷実家と云ふへし。主人為人温厚沈敲、文を善し又詩に巧なり。其夜は吾家に安眠するか如く、一睡暁に徹す。

十一日晴れ、早起して辞し去り、渡頭に出船にて渉り、乃ちまり、歩きやすく時には三丁、五丁下り、また登ること二―三丁。徳善寺の後山から西方に当たり、伊予の石鎚山を十里の向こうに見る。土佐の白髪山が左に高く、潤いのある黛色で、黒っぽい木が繁茂していると見える。この間三里余り、讃岐の魚売り二人に会っただけ。二時、美馬・三好郡の郡境に出る。ここは僅かに石畳を敷き、関門の名残を残した門が朽ちて傾いている。ここから竜頭を下り、川崎村茶店に休憩して下川を渡る。水は甚だゆったりと流れ、たそがれに白地の三木氏の屋敷に帰還した。

聞けば、主人は今日の午後に乗船して徳島に下ったという。母君が、私の労苦をいたわり、下男に命じて新たに湯を沸かして湯あみさせた。酒を出し、夕食を出してくれた。疲労のため、酒を飲むことが出来ない。初めから終わりまで、待遇はなはだ丁寧で、使用人もまた丁重である。これを見ても家政がよく治まっているを知る。

三木氏の役職は、八か村の組頭庄屋を兼ねているので、五十目筒三挺、十匁筒五挺、小銃十挺、弓五張、具足、鎗、長刀、械棍数十、武器ほぼ備わり、その他書籍・文物珍しいものがある。誠に富裕な家というべきである。主人の人柄は、温厚で落着き威厳あり、文を上手に作って詩歌も得意である。その夜は我が家で安眠するようで、暁までぐっすりと寝た。

〔五月〕十一日、晴れ。朝早く起きて辞去する。渡し場で

池田に出、西井川・東井川を過く。此間土地狭く、河滸榛樗を植へ能く番長す。巳後、辻に到る。南天雲起り、心中忽々、市街を見るを欲せす。此処河中に島あり、水際厳石肥土を戴く。故に樹木潤美、東の方に小山あり、八幡宮を祠す。点々民家を見る。粉壁瓦矢多し。愚以為、此所城地によしと。之を土人に敲く。土人日、昔の城墟なりと云。

愚思惟するに、此所より堰し水閘を築けは、永年不動なり。何者両岸倶に堅厳上に石瀬あり。先つ北側足代村に大隻樋を居、北山に並ひ疏鑿して太刀野の西陵を附回し、太刀野に漑けは其利莫大なり。山脚鑿岸甚た難しと雖も、一たん之を鑿ては万代不易と云へし。又南傍加茂・る地、中島有る所便利なり。水を彼是に転し流し、堰処平地となし之を築けは、堅牢成り安し。此より下村、平地狭隘漑浸溢なん。

午後雨脚乱、山を下る、赤目村中通りに至る比、雷鳴甚し驟雨来る。人家なく樹陰に倚り晴を待。頃刻にて即ち晴る。満躯濡ふ。行くこと五六丁にて半田村市街に出、大和屋藤吉を訪ふ。藤吉家に在て互に平安を賀す。強て淹留を勧むるに依

船に乗り池田に出る。西井川・東井川を過ぎる。この間、土地狭く川のほとりに榛・樗の木を植え、よく茂っている。十時、辻に着く。南の空が曇り、心中たちまち〔辻の〕市街地を見る気がしなくなった。ここは、川中に島あり、水際に岩石土砂を積む。ために樹木はよく成育している。東に小山あり、八幡宮を祀る。点々と人家を見る。白壁瓦屋根が多い。私が思うに、ここは城地に適している。これを土地の人に糾す。土地の人は昔の城址であったと言う。

私が、推論するにここを堰して閘門を築けば、長年の間、不動である。なぜならば、両岸が堅牢な岩石上が石の瀬になっている。まず足代村に、一本の大樋を据え、並びに北山を疏鑿太刀野の西稜を回って、太刀野に潅漑すればその利益は莫大なものである。山裾を鑿岸することは甚だ困難ではあるけれど、一旦これを穿てば永久に使えると言える。また吉野川南岸の加茂・西庄・中庄・に潅漑すれば、米六―七千石が産出することができる。総じて堰き止めるのは、中島がある所が便利である。水をあちこちに転じ流し、堰所を平地となして築けば、堅牢で出来やすい。これより下流の村は、平地狭隘で、潅漑すれば水が溢れるだろう。

十二時、雨足乱れる。山を下る。赤目村中通りに至るころ、雷鳴甚だしく俄か雨が降ってきた。人家がなく木陰に依って晴れるのを待つ。しばらくして晴れる。満身濡れる。行くこと五―六丁で半田村の市街地に出る。大和屋藤吉を訪ねる。藤吉は、家にいて、互いに無事を祝す。強いて逗留を勧める

て止宿す。夕景酒肴を出し、相対して交々酌む。大酔熟眠暁を知らす。十二日雨、辰後飯を喫し、酒二三杯傾く。所謂むかひ酒なり。一傘を仮り泥を衝く。行くこと半里許、貞光村永井角右衛門を訪ふ。在宅、自製の煎茶出す。風味極妙なり。酒を侑むれとも固辞して去る。川を渉る、深くて膝を滅る。南傍穴吹谷あり。是に懲りて太田の渡を渉る。雨甚しく猪尻村にて午飯を喫し、芳川北傍を下り、谷島に竹林頗る崩れて芳川に入る。前八日水害の故なり。

申後、藤太夫塚健吉宅に帰る。翌十三日、未後、帰宅す。

是行官命にあらす。故に測器を用る事を憚る。但目撃に従ふ。僅に一羅盤を携るのみ。故に不詳。

芳水源山城探索

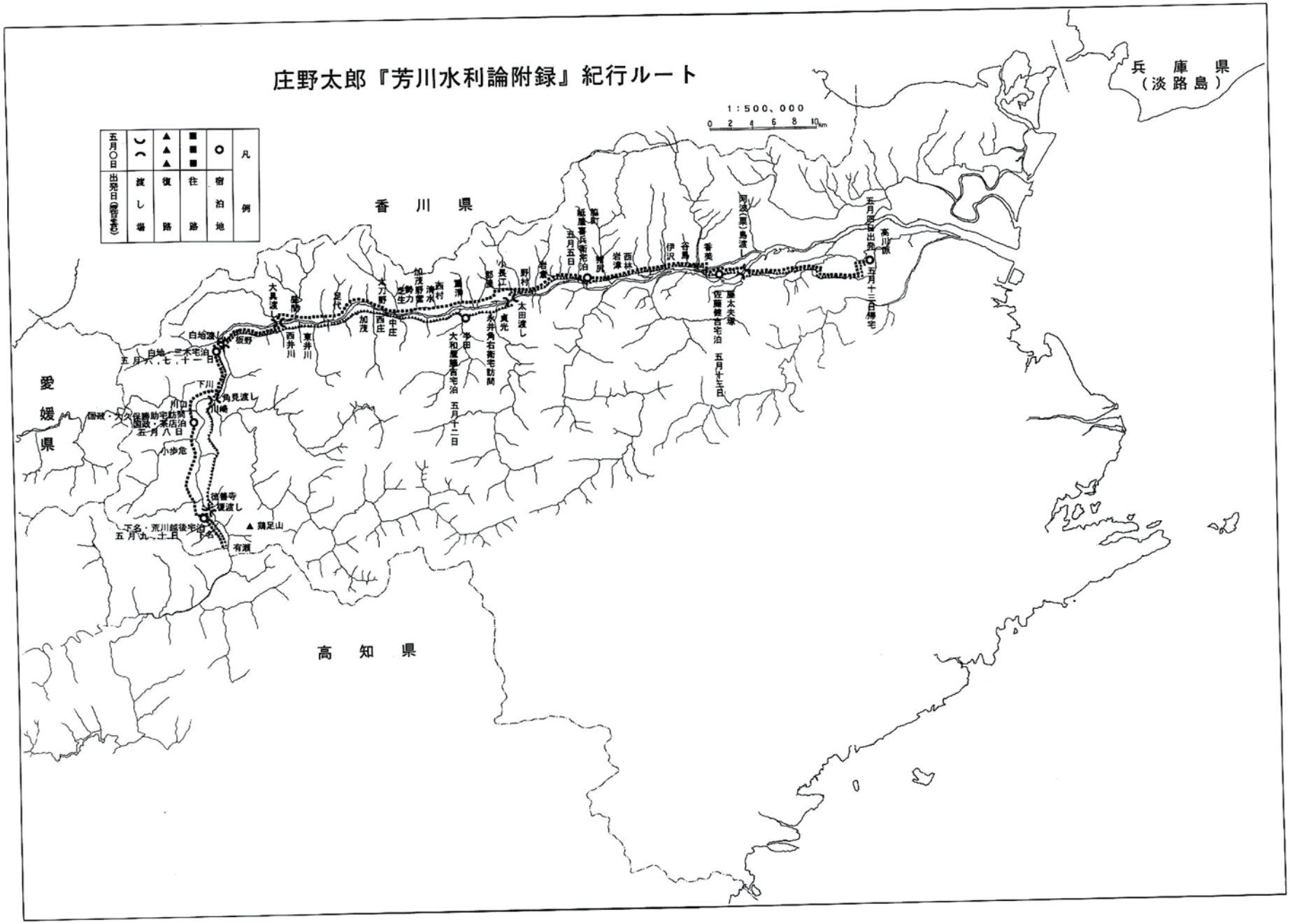
ので、泊まることにする。夕方、酒肴を出だし、向かい合って酌み交わす。大酔いして熟睡、暁を知らず。

〔五月〕十二日、雨。八時食事の後、酒二―三杯を傾ける。いわゆる迎え酒である。傘を借り、泥を衝いて歩く。行くこと半里ばかり、貞光村の永井角右衛門を訪う。在宅しており、自家製の煎茶を出す。風味、絶妙なり。酒を勧めるが、固持して去る。川を渡る、水深く膝を没す。吉野川南側の穴吹川があるが、これに懲りて太田の渡しを渡る。雨甚だしく、猪尻村にて昼食をとる。吉野川北側を下る。谷島の竹林がすこぶる崩壊して吉野川に流れ込んでいる。前日の八日の水害のためである。

四時（申後）に、藤太夫塚の健吉宅に帰る。翌〔五月〕十三日に帰宅した。

この行動は、官命ではない。だから測量器を使用することを遠慮して、目測によった。僅かに一羅盤を携えていただけなので、細かい事は不詳である。

吉野川渓流の山城を探索した。


庄野太郎『芳川水利論附録』紀行ルート
1:500,000
0 2 4 6 8 10km
凡例
宿泊地
往路
復路
渡し場
五月〇日
出発日(宿泊地)
兵庫県
(淡路島)
香川県
愛媛県
高知県
高川原
五月廿三日出発
五月十三日博宅
河淡(原)島渡し
香美
佐藤徳吉宅泊
五月十五日
藤太夫塚
谷島
伊沢
西林
岩津
青沢
紙屋善兵衛宅泊
五月五日
船町
岩倉
野村
小長江
郡頃
太田渡し
真光
水井角右衛宅防関
五月十二日
大和屋善吉宅泊
学田
豊清
西村
清水
加茂野宮
勢力
生
大刀野
西庄
中庄
加茂
息代
屋敷
大見渡し
東井川
西井川
白地渡
板野
白地・三木宅泊
五月六、七、十一日
下川
角見渡し
川崎
川口
保勝助宅防禦
国政・茶店泊
五月八日
小歩危
徳善寺
復渡し
鶏足山
下名・荒川越後宅泊
五月九、十日
下名
有瀬